

よしつねせんぼんざくら

義経千本桜

〔解説〕 竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作。延享四年（一七四七）大坂竹本座初演。全五段の時代物。この作品は「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」と共に浄瑠璃の三大傑作とされています。義経伝説の堀川夜討ち、大物浦、吉野落ちの三事件を骨子とし、そこに壇ノ浦での平家滅亡に際して死んだとされた知盛（とももり）、維盛（これもり）、教経（のりつね）が、実は生きていて源氏に復讐しようとする筋がからませてあります。

〔あらすじ〕

序 段 義経は平家追討の功により、後白河法皇から初音の鼓を賜りますが、実はこれには頼朝追討の院宣（いんぜん）が託されていました。頼朝は義経に使者を遣わし、知盛・維盛・教経の首が偽首であった事、初音の鼓の事を詰問します。義経は申し開きをしますが、正妻卿の君が平家一門の時忠の娘であるということに対しては返答に窮するのです。卿の君は自ら命を断って和睦をはかりますが、追っ手に押し寄せた土佐坊を弁慶が切った事により全ては水の泡となり、義経は都を落ちていったのでした。

二段目 義経は、あとを慕ってきた愛妾静御前（しずかごぜん）を折良く来合わせた家臣佐藤忠信に託して、九州へと落ち延びるため大物浦（だいものうら）渡海屋銀平宅で船出を待ちます。やがて船出した一行に銀平に扮していた平知盛が襲いかかります。綿密な計画に従った行動であったはずが、ふと気づくと事態はいつの間にか壇ノ浦の合戦の再現になっているのです。全てが徒労に終わった事を悟った知盛は、守り通してきた安徳帝を義経に託し、碇を背負って海へと飛び込み、壮絶な最期を遂げます。

三段目 維盛の妻子、若葉の内侍(ないし)と若君六代君(ろくだいきみ)は、主馬小金吾(しゆめのこきん)この供で高野を目指しますが、途中でいがみの権太に金を騙し取られてしまいます。内侍らに源氏の討手がかかり、小金吾は討ち死してしまいますが、そこへ通りかかった鮎屋の弥左衛門が何を思ったか小金吾の首を切って持ち帰ります。

〔すしやの段〕弥左衛門はその昔、平重盛に恩を受けた身であったため、維盛を奉公人の弥助として匿っていました。事情を知らない娘のお里は、弥助と夫婦になることを望んでいましたが、追われた内侍と若君が鮎屋に逃げ込むと、事情を理解し、三人を逃がします。母親に金の無心をしようと忍び込んでいた権太が褒美目当てに跡を追います。弥左衛門は討手の梶原に偽首の入った鮎桶を出しますが、その中に会ったのは権太が母親から騙し取った金でした。そこへ権太が首の入った鮎桶を梶原に差し出して、褒美の羽織を受け取りますが、激怒した弥左衛門は権太を刺します。しかし、権太は苦しい息の下で、首は小金吾のもの、内侍と若君は自分の妻子であったと父に告げるのでした。そこへ現れた維盛が梶原の置いていった羽織を裂くと、中から袈裟衣が現れて、実は頼朝もかつて重盛に助けられた恩返しに、維盛を助けるつもりであったことが判るのです。

四段目 吉野の河連法眼(かわつらほうげん)の館に匿われている義経のもとへ国元に帰っていた佐藤忠信が尋ねて来ますが、そこへ静御前の供をしたもう一人の佐藤忠信が現れます。不審に思った義経が静御前に詮議させると、実は初音の鼓の皮に張られた狐の子が、親を慕って忠信に姿を変えていたことが判ります。義経から鼓を与えられた子狐は、責めてくる教盛を狐の力で散々悩ませて義経の恩に報いるのでした。

五段目 頼朝と義経の仲を裂こうとした藤原朝方は教経に討たれ、忠信もまた教経を討って八島の戦いで兄の敵を取ります。

すしやの段

春は来ねども花咲かす、娘が漬けた鮓ならば、なれがよかると買いにくる。風味も吉野、下市に売り広めたる所の名物、釣瓶鮓屋の弥左衛門、留守のうちにも商売に、抜け目も内儀がはや漬に、娘お里が片襷裾に前垂ほや／＼と、愛に愛持つ鮓の酢、押さへてしめてなれさする、うまい盛りの振袖が、釣瓶鮓とはものらし／＼。締木に栓を打ち込んで、桶片付けて、

「申し母様、昨日父様の言はしやるには、明日の晩には内の弥助と祝言さす程に、世間晴れて女夫になれと仰ったが、日が暮れてもお帰らないはマ嘘かいなア」

「オ、あの言やることはいの。なんの嘘であるぞ。

器量のよいを見込みに熊野参りから連れて戻って、

気も心も知ると弥助というわが名を譲り、主は弥左衛門と改めて内の事任せて置かしやるは、そなたと娶わす兼ねての心。今日は俄に役所から親父殿を呼びに来て思はぬ隙入り。迎いにやるにも人はなし」

「サイナア、折悪う弥助殿も方々から鮓の誂へ、仕込みの桶が足るまいと、明桶取りにいかれましたが、もう戻らるゝでござんしよ」と、噂半ばへ明桶荷い戻る男のとりなりも、利口で伊達で色も香も知る人ぞ知る優男、娘が好いた厚鬢に冠、着せても憎からず。

内へ入る間も待ち兼ねて、お里は嬉しく、「アレ弥助様の戻らんした。待ち兼ねた遅かった。もしやどこぞへ寄ってかと、気が廻った案じた」と、女房顔して言うて見る、さすが鮓屋の娘とて、早い馴れとぞ見

えにける。母はにこ／＼笑いを含み、

「イヤコレ弥助殿、気にかけて下さんな。この吉野郷は弁財天の教へによつて、夫を神とも仏とも戴いていよとある天女の掟。その代わり程愷気も深い。

がまた有様は親の孫、瓜の蔓にはござらぬ」と、言いくろむれば、

「これはまあ却つて迷惑。もう段々お世話の上、大切なお娘御まで下され、お礼の申し様もござりませぬ。さりながらとかくお前には弥助殿々々と、殿付をなされて、さりとは気の毒。やつぱり弥助どうせい、かうせいとお心安う、ナ申し」

「イヤ／＼それは赦して下さい」

「ソリヤまたなぜでござります」

「さればいの。弥助という名はこれまで連れ合いの呼名。殿付けせずはどうせいかうせいとは、勿体な

うて言いにくい。言い馴れた通り殿付けさして下さい」

と、げに夫をば大切に、思う掟を幸いに、娘へこれを聞けがしの母の慈悲とぞ聞こえける。お里、弥助は明桶を板間へ並べている所へ、この家の惣領いがみの権太、門口より乙声で、

「母者人々々々」

と、言ひつゝ入ればお里はびっくり、

「また兄様か、ようお出で」

と揉み手する、

「エ、きよときよとしい、その面なんぢやい。よう来たがびっくりか。わりやアノ弥助とへ、うまい事しているそうなが、コリヤ弥助もよう聞け。今追いつて出れていても、釜の下の灰までおれが物じゃ。今日は親父の毛虫が役所へいたと聞いたによつて、ちと

母者人に言う事があつて来た。二人ながら奥へ失せ

う」

と、睨み廻されうぢ／＼と、

「これに」

と言うて立つ弥助、娘も後に引添ふて、一間へこそは入りにけれ。後に母親溜息つき、

「コリヤまた留守を考へ無心に来たか。性懲りもない腕白者、そのおのれが心から、嫁子があつても足踏み一つさす事ならぬ。聞きやこの村へ来ているげなが、互いに知らねば摺れ合うても、嫁姑の明き盲目、眼潰れと人々に言われるが面目ない。エ、不孝者め」

と目に角を、立て変わったる機嫌にぐんにやり、直ではいかぬといがみの権、思案しかへて、

「申し母者人。今晚参つたは無心ではござりませぬ。

お暇乞いに参りました」

「ソリヤなんで」

「私は遠い所へ参ります程に、親父様もお前にも、

随分おまめでおまめでと、しほれかければ母は驚き、

「遠い所とはそりやどこへ、どうした訳で何しに行く」

と、根問は親の騙され小口、

「サアしてやった」

と目をしばたゝき、

「親の物は子の物と、お前へこそ無心申せ、つひに人の物箸かたし、歪んだ事も致しませぬに、不孝の罰か、夜前私は大盗人に遭いました」

「ヒヤア」

「その中に代官所へ上げる年貢銀、三貫目というもの盗み取られ、言ひ訳もなく、アア仕様もなく、お仕

置きに合うよりはと、覚悟極めております。情ない目に遭いました」

と、かます袖をば顔に当て、しゃくり上げて出ぬ涙、鼻が邪魔して目の縁へ、届かぬ舌ぞ恨めしき。甘い中にも分けて母親、誠と思ひ共に目を摺り、

「鬼神に横道なしと年貢の銀を盗まれ、死なうと覚悟はまだ出かした。災難に遭うも親の罰、コリヤやう思い知れよ」

「アイ〜、思い知ってはおりますけれど、どうで死なねばなりませんまい」

「コリヤやい」

「アイ〜」

「常のおのれが性根故、これも銜りか知らねども、しょうぶ分けにと思つた銀、親父殿に隠してやろ。

これでほつとり根性直せ」

と、そろ〜戸棚へ子の蔭で、親も盗みをする母の、甘い錠さへ明け兼ねる、

「エ、つひ雁首で、こち〜がよござりまする」
と仕馴れたる、おのが手業を教ゆる不孝、親はわが子が可愛さに地獄の種の三貫目、後をくろめて持つて出で、

「なんぞに包んでやりたいが」

と、限らない程甘い親、

「うまいわろぢや」

といがみの権、鮓の明桶よい入れ物、

「これ〜」

と親子して、銀を漬けたる黄金鮓、蓋閉め栓締め

「サアよいは、これで目立たぬ提げて去ね」

と、親子が工合の最中へ、苦い父親弥左衛門これも疵持つ足の裏、あたふたとして門口を、

「戻った明けい」

と打ち叩く、

「南無三、親父」

と内には転倒うろたへ廻り、

「その桶を、こゝへ〜」

と明桶と共に並べて親子はひそ〜、奥と口とへ引き別かれ、息を詰めてぞ入りにける。

「エ、なぜ開けぬ、開けぬ」

と、頻りに叩けば奥より弥助、走り出でて戸を開くる。内入り悪く辺りを見廻し、

「エ、コリヤまたどいつも寝ておるか。言い付けた

鮓どもは、仕込んであるか」

と鮓桶を、提げたり明けたりがった〜

「ム、コリヤ思う程仕事が出来ぬ。女房共やお里め

はなにしておるぞ」

「ア、イヤ、只今奥へ呼びましょ」

と行く弥助をば引き止め、内外見廻し表を閉め、上座へ直し手をつかへ、

「君の親御、小松の内府重盛公の御恩を請けたる某何卒御子維盛卿の御行方をと、思う折から熊野浦にて出合ひ、御月代を勧めこの家へお供申したれども、人目を憚り下部の奉公。余りと申せば勿体なき。女房ばかりに子細を語り今宵祝言と申すも、心は娘を御宮仕へ。弥助々々と賤しきわが名をお譲り申したも、いよ〜助くるという文字の縁起。人は知らじと存せしに、今日鎌倉より梶原平三景時来つて、維盛卿を匿へあると退引させぬ詮議。烏を鷺と言ひ抜けては帰れども、邪智深い梶原、もしや吟味に参ろも知れずと、心工みは致して置けども、サア油断は怪我の元、明日からでもわが隠居上市村へお越しあ

れ」と、申し上ぐれば維盛卿、

「父重盛の厚恩を請けたる者は幾万人、数限りなき
その中に、おことが様な者あらうか。昔は如何なる
者なるぞ」

と尋ね給へば、

「ハ、ア、私めは平家御代盛りの折から、唐土育王
山へ祠堂金お渡しなさるゝ時、音戸の瀬戸にて舶乗
りすえ、三千両の金分け取りに致した船頭。御詮議
あらば忽ち命を取られんに、ハ、アありがたいは重
盛様、『日本の金唐土へ渡すわれこそは、日の本の盗
賊』と、御身の上を悔み給い、重ねて何の詮議もな
く、親里へ立ち帰つて由緒ある鮎商売。今日を安楽
に暮せども、伴権太郎めが盗みかたり。殺生の報い
ぞと思ひ知つたる身の懺悔。お恥ずかしゅうござり
ます」

と、語るにつけて維盛も、栄華の昔父の事、思い出だ
され御膝に、落つる涙ぞいたはしき。

※演者・時間等の都合により多少の異同がござります。